さやま人インタビュー

狭山の伝説と昔話を掘り起こす童絵作家　池原昭治さん

１９３９年香川県高松市生まれ、狭山市水野在住。童絵作家。「まんが日本昔ばなし」演出、作画、美術担当。狭山市史・民俗編執筆。狭山観光大使。日本各地の民話を訪ね歩き、「童絵」という独自の画風を確立。さぬきの国で子守りの人から聞いた昔話を原体験とする。そのため童絵「守りっ子」はほとんどさぬき顔（ぽっちゃり顔）である。趣味はスポーツで、バトミントン、ソフトボール、最近ではペタンクなども楽しむ。

●狭山の原風景と伝説

狭山・入間・飯能・日高に残る「入間伝説」がある。…むかしむかし、お天道様が二つ出た。驚いた村人は弓の名人に弓で射てもらった。すると二つ目の太陽は三本足のカラスだった。この伝説から、矢おろし毘沙門天・征矢（そや）神社・矢久（やきゅう）橋などの地名が残った。これが、「入間＝射留魔（いるま）」の伝説だ。

大泉学園にある東映動画に勤めていた関係で、職場結婚の奥様と探したのが、今の狭山市水野の自宅だった。四十五年前に狭山市に住むようになった頃にはまわりは雑木林ばかり、近くの家は五軒ほどだった。雑木林を歩き回り、お地蔵様を探し、古老に話を聞いた。歴史の話よりも生活や民話の話を興味深く、面白く聞いた。

●「まんが日本むかし話」の舞台

狭山に引っ越してきた当時は、民話や伝承を調べに狭山の図書館に行った。入間川町史があるだけだった。教えてもらった伝説も「影隠し地蔵」のみだった。そして、調べて作ったのが後の狭山市史・民俗編につながっていった。

狭山市の人が昔の話を聞く座談会を開いてくれた。「昔話」について聞くと歴史の話と考えるようだが、それよりは世間話、狐の話、伝説の話の方が面白い。

「まんが日本むかし話」の初めての物語「鬼子母神様」は自分で探して作った作品だ。これは完成までに一年の月日がかかった。

高度経済成長の中、毎週放映のテレビ番組なのに、よく待ってくれたものだと思う。まだのどかな時代だったのかもしれない。

上広瀬の信立寺に伝わる「子育ての鬼子母神様」のむかし話も取材した。市の公式ホームページ「さやまの絵本」に詳しく掲載されている。テレビ放映された二十七本中三本は狭山のむかし話だ。「鬼子母神様」、「大六天」、「諏訪神社の竜神様」だ。

●残しておきたい狭山の風景

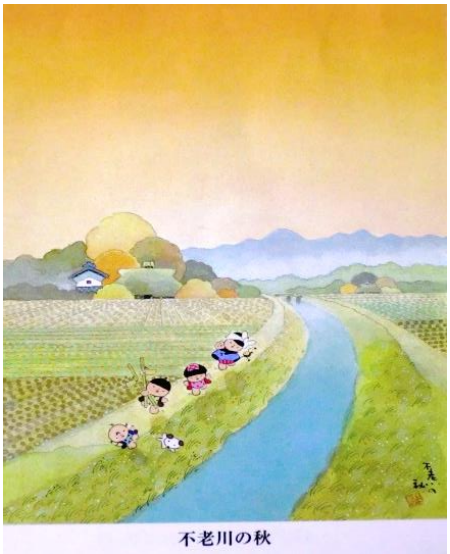
今取り組んでいるのは、狭山地区に埋もれている伝統文化や風景などの価値を掘り起こすことだ。私たちの周囲に残っている自然や街、民話や伝承を多く拾い、これからも伝えていきたい。

わらべ歌、伝承遊び、伝説はいろいろある。入曽は「入（い）る磯（いそ）」から来たという説がある。まだ、狭山が海の近くだった原始の頃があり、貝塚も残っている。

不老川には数多くのむかし話が語られている。その中でも有名なのが「豆まきの晩に不老川の橋の下で一晩過ごすと歳を取らない」という「としとらず伝説」だ。古老にこの話を聞いた時、「ふろうがわ」と言ったら、「よそから来た人はみんなそう言うが、それは『としとらず』と読むんだ」と言われた。

諏訪神社

地元の人も知らないことも、一緒になって再発見していきたい。私の童絵と狭山の人の写真で同時展をやり「さやまを第二の故郷に」と思い、これからも日本の故郷の原風景を追い求めていきたい。


不老川の秋